

サービス提供の現場から

（アシステッドナーシング&リビング鶴の苑の取り組み）

社会福祉法人合掌苑が運営する介護付・住宅型有料老人ホーム「アシステッドナーシング&リビング鶴の苑」では、逝去した入居者の90%以上に、ホーム内で看取りを行っています。その一連の取り組みについて、介護福祉士の行野朱美さんと看護師の竹廣沙知子さんに話を伺いました。

✓ 看取りに活用できることを「メモリー表」に記録

鶴の苑では、看取りに際して活用できる「メモリー表」を入居者ごとに用意しています。

入居時、併設しているクリニックの医師のもと、入居者・家族と面談する場で、延命処置の希望などについて回答があった場合、その内容を、同席した介護・看護職員

が「メモリー」表に記入します。しかし、入居時には、はっきりとした回答がない場合が多いので、入居後、日々の生活の支援を通して、把握したことを記録していきます。

ある入居者は、介護職員との会話にて、「私が死んだら、居室のたんすの上から2段目に、白地のしほりの着物があるから、着せてくださいわ」と具体的に伝えてきました。また、別の入居者からの「私、猫舌なの。トロより赤みが好きなの」という声も、最期に食べたいものを食べてもらうために、役に立つ情報ととらえます。

「他の入居者がお亡くなりになった際に、私はこうしてほしい」とおっしゃる入居者もいますので、しっかりと記録しておきます」と行野さん。「メモリー表」により、ケース記録に書いて埋もれてしまうことを避けることができます。また、看取りの段階になった折に、家族に対して本人の意向を明確に伝えることもできます。

✓ 入居したときから看取りは始まっている

いつも行っていた生活動作ができなくなり、看取りの時期に入ったら、介護職員から看護職員、看護職員から医師、そして医師から家族へと連絡のうえ、同意を得て対応します。

鶴の苑では、夜間帯は看護職員が不在で、

オンコール体制をとっています。死期が近づいてきた入居者については、たとえば「血圧が50mmHg以下になったら看護職員に電話連絡をする」など、介護職員は夕方までに、夜間の必要な連携内容を具体的に確認しています。また、家族にも早めに連絡し、ホームに寝泊まりすることを提案します。

逝去に際しては、すぐにエンゼルケア（死後の処置）を開始。家族とお化粧などを一緒に行います。逝去した入居者の約80%は、敷地内のホールで葬儀も行います。看取りへの対応が終了した後、かわった職員を中心に、看取り後カンファレンスを実施。よかったことや次に活かせることなどを話し合います。精神的に負担となった職員のフォローにも配慮しています。

鶴の苑では、「入居したときから看取りは始まっている」と考えています。昨日まで大事なく生活していた入居者が、突然亡くなるようなケースもあります。「元気なうちから、本人が望むことをかなえていこう」と、食べたいものを食べに出かけたり、酸素ボンベを携帯してパチンコに興じたり。ベッドの上での最期に至っても、入居者の要望があれば、その日のうちに叶えるために、必要なものは買い出しに赴きます。逝去して1年後の命日に、ホームに立ち寄ってくれる家族もいるとのこと。納得のいく看取りを行うことのできた証といえます。



介護福祉士の行野朱美さん(上)と
看護師の竹廣沙知子さん